

この身は鞘でできている

内臓脂肪が多いガリノツポ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

―― この身は鞘でできている。

―― 全ては彼の為に。その剣をこの身で癒そう。

目次

魔術師の観点	1
衛宮兄妹	5
あの日から変わらずに	12
遠坂凜は妬ましい	21
ラスボスは意外と近くにいる	29
始まりの夜にて	37
描くは二つの朱槍	44
鞘の由縁	50

魔術師の観点

衛宮士郎という人物について、学校の人に聞き込みを試みた。

(ワカメ髪のナンパをしてくるウザい男子学生)「はあ？衛宮について聞きたいだつて？なに？お前あいつのこと好きなわけ？ついでやごめん!?気に障ったなら謝るからさ!?だからその後ろに引いている拳を元に戻してくれ!!」

ふう、んで衛宮についてだつて？ああ、あいつはお人好しの甘ちゃんだからお願ひすればほぼなんでも聞いてくれるんだよね。雑用なんかも代わってくれるからさ、僕に限らず色んな奴に使われてるよ。後は生徒会長と仲良いから何かと噂は絶えないね。まあ、取り敢えずはあいつのあだ名のバトラーってのが衛宮そのものだと思ってくれて良いよ。けどあいつの妹が、悪意を持って衛宮を使おうとするとなあー

(私の好敵手)「衛宮についてねえ。衛宮はもの凄い弓道が上手いんだよ。そりやもう百発百中な位に。それに人柄も良いし、後輩からも好かれるし、物も大切にする奴だしね。だから本当に辞めちやつたのが悔やまれるよ。どれだけ言っても戻って来るつもりは無いみたいだしさ。確かに衛宮は超お人好しだけどね、それと同じくらい、頑固なんだよ。衛宮の妹が言えば違うかもしれないけど、妹は衛宮を全肯定だからさー

(陽気な弓道部の顧問)「あら、しろゲフンゲフン！衛宮君のことですか？んー、彼はとっても料理が上手いのよ。女の子の中じや料理を学ぶ為に教えて下さいって言う子までいるんだから。それと、ここだけの話だけど、実はね？士郎ってば小さい頃の夢が正義の味方だったのよ。あはは、可愛いでしょ？本当に正義感の強い子なのよ？特に妹さんのことになるよねー。今は鳴りを潜めたんだけど、昔は本当に大変だったー

(私を目の敵にする生徒会長)「むっ！何か用か女狐。何？衛宮についてだと？貴様一体何を企んでいる。俺は何があらうと友人を売ったりはせぬぞ！

ふむ、衛宮の人柄について聞きたいと。確かに衛宮は客観的に見れば誤解を受けやすいかもしれん。ならばここでそれを解くのも友人の務めか。うむ、衛宮は知つての通り穏やかで人の為と行動を起こしてくれるとても良い奴だ。だかしかしな、それを良いことに衛宮に雑務を押し付ける不届き者がいるのも確かだ。しかもあやつはそれを知っていても断ろうとはしないのだ。その理由が俺にはいまいち納得できなくてな、そこが衛宮の良過ぎる性格の弊害とでも言うべきか。衛宮の妹にも止めるように直接言つては貰ったのだが俄然――

「うーん、悪い奴ではないし、人から嫌われてる訳でもないし、かと言って自分を偽っている訳でもない。取り敢えず聞き込みの結果はこんな感じかしらね。」

冬の肌寒さを感じ始めた秋の終わり頃。遠坂凜は衛宮士郎について考えていた。彼女も年頃の女の子なので異性に興味を示している――訳ではない。

「まさか衛宮君が魔術師だなんて思つてもみなかったわ。けど色々な人に聞いてみた限りでは彼が魔術師とは到底思えないのよね。」

回想するのは丁度一週間前。朝に学校の廊下をいつも通りに歩いていると、彼女を毛嫌いする生徒会長と会った。事のそもそものはそのときである。相変わらぬ酷い反応をされていた彼女は、それを聞き流すためにあさつてを向いていると、生徒会室に入る人影が見えた。

それにつられて開いた扉の方を見ると、驚愕の光景が視界に飛び込んできた。何ということか、衛宮士郎が解析の魔術を使っているではないか。

これはどうということだと、若干の動揺があつた彼女だが、何を隠そ

う彼女は優雅であることを家訓とした天才魔術師である。そんなことはものの数秒で無くなり、その時には既に彼女の焦点は、衛宮士郎の魔術師としての面についてに合わせてあったのだ。

「けど、なんか解せない。」

その通りである。暗示を併用した聞き込みの結果は、魔術師の近所付き合いのセオリーからは外れた深い関わりを持つ人間が多数存在している。いや、万人に対して奉仕するなどという行為がある時点で既に魔術師からは大きく外れている。

「とうかそもそも何でストーブの修理に魔術なんか使うのよ！全然意味わかんないわ！」

衛宮士郎の解析魔術の対象はストーブだったのだ。魔術は秘蔵するもの。これは魔術の世界ならば、世間常識を知らない幼子ですら知っている常識である。それを扉を閉めるだけで何の対策もせず、しかも学校で、さらにはストーブ修理などという魔術要素皆無なことに使用されている理由が彼女には皆目見当がつかなかった。

「……そうよ、一度落ち着きなさい遠坂凜。余裕を持って優雅たれ。余裕をなくしちゃ冷静な判断は出来ないわ。もう一度見て聞いたことから疑問点を探すのよ。」

遠坂凜は理解出来ずに困惑していた脳内を一度リセットした。彼女の天才である由縁こそが、この瞬時に冷静になれる精神力から来ているであろう。

「衛宮士郎に限らず何か他に不審な部分は無かったかしら、そうよ何かがおかしいわ。何か明らかに目立つ点があった筈。」

彼女の思考の釣り針に引っ掛かったのは、聞き込みをしていた時に感じた『またか』という違和感。必ず衛宮士郎の話しをしていた中で
出　　て　　き　　た　　単　　語、　　そ　　れ
は

「……………『妹』、ね。」

彼女が聞いた話しの中では誰の口からも、『妹』という単語が出てきていたのである。これは重要な点だろうと彼女は思った。

「士郎のお馬鹿ちゃん、機械弄り好きの変態、冬木のバトラー。」

「どうしてそんなに怒ってるんだよ、俺お前に何かしたか？」

「そもそも自分が何をしでかしたか、それに気づいてないから手に負えない。士郎はもう一度、国語の授業を小学生からやり直すことをお勧めする。」

「ひ、酷い言い草だな。一体全体俺が何をしたって言うんだよ、それを教えてくれなきゃ謝ることもできないじゃないか。教えてくれよ『きゃ』。」

衛宮さや は、衛宮士郎の妹である。これはそんな彼女の存在によつて変わる正義の味方の物語である。いや、正義の味方に正義を貫かせる物語の、プロローグである。そう、これは飽くまでプロローグなのだ。そのプロローグが始まるのである

「それじゃまず士郎、正座。」

「何で突然正座なんk「正座」って俺の話しをk i「正座」……アツハイ」

始まるのである（汗）

衛宮兄妹

「……もう一度自分が言ったことを冷静に言ってみて。そうすれば私が何で怒ってるかわかる。」

伝えたいことを簡潔に言葉にした、眩く様な声の一つ。しかしながらこの声、どうやら怒りを含んでいるようである。

「えっと、一週間前に授業前に一成に頼まれてストーブを修理したとき、俺がストーブに解析魔術を使つてたのをさやに怒られたら？今日は商店街で安く色んな食材が買えたからさ、そのお詫びも込めて今日の晩御飯はリクエストに応えるぞ、ってことを言つた筈だけど。何かおかしいところあったか？」

しかしながら、その怒りを向けられている彼には、その理由がわからないようだ。彼は当たり前のことをしたただけだが、何か問題でも。とでも言わんばかりの顔をしていた。これを素でやっているのだから、それを見る相手の怒りはより大きくなって当然だ。

「………ねえ士郎。話の途中で、そういえば生徒会長と遠坂凜の言い合いが部屋の外から聞こえたって言つてたよね？」

「ああ、確かに言つたな。けどそれに何か問題でもあるのか？」

「まだわからない……？士郎、遠坂凜に魔術を見られてた。ほぼ確実に。」

そう、士郎は遠坂凜に魔術を見られていたのである。さらにはそれにより、士郎についての聞き込みが既に始められている。魔術師である疑惑どころか、どう対処すべきかという対策まで考えられているという訳だ。そして魔術師が魔術師に対する対処の仕方など、言うまでも無いであろう。

魔術を扱う者としての常識をいまいち理解できていない士郎にも、ここまで言われたからには状況が理解できるだろう。そう、今彼の立ち位置は、

「………絶対絶命じゃないか。」

士郎は、このまま行けば自身の進む先には死しかないことをようやく悟つたのである。再三になるが、魔術は秘蔵する物である。魔術と

いう物の知名度が上がれば上がるほど、その神秘は消えていく。それ即ち、魔術師の悲願である『根源』への到達から遠ざかるということだ。

「普通の魔術師ならそんな愚行をした魔術師は必ず消す。だからあれほど士郎に気をつけるって言った。」

「……ごめんな。俺のせいできやに迷惑が掛かったみたいだ。ってそうだ、俺の方には何もなかったけど、さやの方は襲われたりはしてないよな？」

一般人がこれを聞いたら彼は何を言っているのだ、と思うことだろう。明らかに死に近いのは自分にも関わらず、人へ掛けた迷惑の方を気にしている。どうやらこの男はどこか螺子が外れている部分があるようだ。

「私の方も特に。けど、魔術使うなら警戒心を持ってほしい。そうしないと一般人にも迷惑が掛かる。それは士郎が嫌うことの筈。」

「そうだな、さやの言う通りだ。気をつけるよ。」

衛宮士郎のおかしな発言に、衛宮さやは指摘をすることはなかった。そして、迷惑が掛かるといふ言葉の範囲に自分を数えてはいないようである。蓋を開けてみると、兄だけでなく妹も普通からかけ離れている思考を持っているようである。

「それよりも、遠坂凜への対応を考えるべき。士郎が魔術を使用しているのを目撃されて既に一週間経ってる。遠坂凜は影ながら此方にアクションを掛けている筈。それも踏まえて穏便に済ませる方法を探す。」

彼女は死の可能性が出て来ても、いたって冷静だった。仮に魔術師がこの光景を見たのなら、間違いなく彼女の方が魔術師だと考えることだろう。

「やっぱり俺は直接話しをしたい。一部は隠すとして、他は正直に話せばいいと思う。こっちに敵意はないってことを伝えればお互いに気にせずに済むだろ？」

「……士郎のすかぽんたん。」

ボソツと呟かれたその言葉は、的確に士郎の心のウィークポイント

を買いた。

「なんでさ!？」

「…人の話しを聞いてた？ 私たちが消されるかもしれない理由は、大衆の近くで隠蔽もせずに魔術を使うこと。正直になんて話したらそれこそそんな事をする奴と思われる。それに士郎は隠蔽の仕方也不知道。相手からしたら赤子が国家機密を持ち歩いてる様に見える。」

「……確かにそうだな。でもそれじゃあどうすれば良いんだ？ 遠坂に嘘をついても多分意味は無いと思うぞ。」

「それは間違いでは無いと思う。だから交渉は止める。」

話しをした場合、例えば嘘をついてもつかなくても恐らく異端だと思われ遠坂凜に消される。いや、正直に話した場合以上に、冷酷な対応を受けることにだろう。そう予想を立てた彼女はまた違う方法を考えた。

「……こうなってしまったのなら、このままとことん目的が見えない魔術師を演じれば良い。」

彼女はただ淡々と、ただ冷静にそう答えた。士郎はその彼女の様子に少しムツとした顔で、

「それは駄目だ。」

はつきりと彼女に否定の意思を伝えた。

「何故？ 会話をするより良い筈。」

「お前がそんな顔をした時は、自分だけに被害が行くような行動を取るときだ。そんなことは俺はさせられない。」

「……自分のことは棚に上げて、人の事は言うの？」

どうやら凶星だったらしく、こちらもムツとした顔をしていた。

「何と言おうが駄目だ。今回の一件は俺のミスが起こした事だろ？ それをさやに押し付けるなんて駄目に決まってる。それに俺はお前の『兄』だ。」

さやにはその言葉の中にどれだけの思いがあるかが判っている。故に言葉を返すことなど出来る筈もなかった。

「……………士郎のシスコン。」

妹がその言葉を口にしたときは、自分を肯定してくれた時だと士郎は知っている。だからもう迷わなくて良いのだ。

「取り敢えず俺に遠坂と話しをさせてくれ。それで駄目だったらさやの力を借りる。それじゃ駄目か？」

「…好きにすると良い。私は観てるから。」

「そうか。それじゃ頑張らなきゃいけないな。兄としてかわいい妹の前で手を抜くわけにはいかない。」

さやは思わず呆れた。何故この男からはこんな恥ずかしい台詞が、すらすらと出てくるのだろうか。

「失敗したら末代までの話しの肴にする。ナンパして振られたつて。」

「なんでさや？」

けど嬉しくない訳じゃない。

衛宮士郎と衛宮さや。衛宮兄妹は今日も仲が良いらしい。

今でも脳裏から離れず、何度も繰り返し頭の中で再生されるその光景。それは俺という人間の原点をつくった『忘れたくない』光景だ。熱く、暑く、熱く、暑く、視界は赤と黒で染まり、永久に続いているんじゃないかと思うほどに、道は限りなく向こう側までその色に染まっていた。

それでも生きる為に、いや、きっとそんなことは考えていなかっただろう。そうだ、たしか恐怖から逃げる為に、俺はただひたすらに足

を進めていたんだと思う。

周囲からは何かが燃え、焼ける音が響き、その音に対応するかのよう
に人の叫び声、呻き声、そして泣き声が聞こえた。それは聞いてい
るだけで気がおかしくなりそうで、俺は自分の耳を、涙の通り道と
なった両手で力強く塞いでいた。けど、その程度の耳栓でその音が俺
に届かなくなることは無く、俺はその絶望から目も耳も逸らすことは
出来ずに、五感全てでその地獄を感じさせられたんだ。

その中で沢山の死んでいく人を見た。炎に吞まれ、潰されていく人
を見た。誰かに助けを求める人を見た。そんな人を助けようとして
自分もそうなる人を見た。

そう、『地獄』を見た。

その光景はこの世の不条理を体現しているかのように、圧倒的で、
そして残酷で、この世の真理を教えているかのように模範的な、死を
俺に見せつけたんだ

燃えゆく道を生きる屍のようにフラフラと歩いていた俺は、不意に
視界に入った人影に意識を戻された。

それは女の子だった。当時の俺と同じくらいの年齢の、背中まで伸
びた黒髪が特徴的な女の子が、燃え盛る火の海の中で何をしている訳
でも無くそこに立っていたんだ。

「……あ、危ないよ……？は、早く此処から逃げなきゃ……！」

今でも何故この台詞が口から出たのか不思議でたまらない。俺は
助けを乞う人を見捨てて逃げてきた筈なのに、それなのにその女の子
の身を案じる言葉を口にしたんだ。

声を掛けられたことに気づいたその女の子は、此方を向くと一言、

「……なんで……も……そんな顔を……？」

そんな言葉を口にして、そのままその場に倒れてしまった。

「だ、大丈夫!?ねえ、起きないと死んじゃうよ!」

目の前で倒れた女の子に、困惑した俺は数分間体を揺すりながら声
を掛け続けていた。

数分後、このままではこの女の子も自分も死んでしまうと悟った俺は、既に精神的にも身体的にも満身創痍の自分の体に鞭を打ち、女の子を背中に背負った。身体に強い負担が掛かり思わず顔をしかめたが、それでも一歩一歩足を踏み出し前に進もうとした。この時は何を考えていた訳でもなく、ただ必死だったように思う。

気がつくまで俺はいつの間にか倒れていた。もう、体に力が入らないし、意識も朦朧としていた。けど、仰向けになっっている俺の腕には、しっかりとその女の子が抱きとめられていた。

「……助けられなくてごめん……」

悔しかった。ひたすらに悔しかった。この地獄から誰一人救えなかった自分に嫌悪感を抱いた。けれど体は指一本たりとも動かず、俺に出来たのは及ばない自分の力に悪態をつき続けることだけだった。

何故この子を助けられなかった

何故自分はこんなにも弱いのか

何故助けを乞う人を見捨てたのか

何故この子に謝ることで救いを得ようとするのか

何故、何故自分は既に諦めているのか……!?

俺は悔しさに涙を流した。表情は一ミリたりとも動かせなかったが、ありつたけの涙を流した。嗚呼、こんなところで……

「……………良かった……生きてる！生きてる！」

男の人が俺を抱き締めた。女の子も一緒抱き締められていた。彼女を守る様に抱き溜めていた俺を、その男は探し物を見つけたかのように強く抱き締めたんだ。

その顔と言ったらもう、これ以上ない程に嬉しそうで、涙と笑顔で

ぐちゃぐちゃで、助けられたのはひよつとして男の方なんじゃないかと思うほどに嬉しそうで、俺は悔しかった。

けど、俺はもう死ぬ。そのことを俺は如実に感じていた。だから、俺は死んでしまうけど、この女の子は助けてあげて欲しかった。俺にはそれが出来ないから、悔しくてたまらないけど。その顔をするのが自分ではないことが嫌で嫌でたまらないけど、

「……この…子……を……、」

本当に最後の力を振り絞って声を出した。それを口にした瞬間、意識が遠のいていく。

「—————!!—————!!—————!!—————!!—————!!」

もうその男の人が何を言っているのかは聞き取れなかった。けど、朦朧としている意識の中でも、その男が強く頷いてくれたことは分かった。意識が、完全に黒に染まる直前に強い黄金の光を見た。何故だかその女の子が脳裏に浮かんできた。

あの日から変わらずに

「…ふうん、そっちから来たんだ。私もあなたが来ないなら今日押しかけようとしてたわ。私より早く話しをしに来たのは、懸命な判断ね。」

次の日、昼休憩の時間になると同時に、屋上にいる遠坂凜に、士郎は会いに行った。

士郎は屋上を見渡すと、一人アスファルトに腰掛ける彼女の姿が視界に入った。その両手にはコンビニのサンドイッチと、これまたコンビニで買ったであろうレモンティーが握られていた。しかしその素朴さとは裏腹に、その表情は険しかった。

「遠坂、取り敢えず飯にしないか？昼放課の時間にも限りがあるからな。昼を食べ損ねるのは午後の授業にもさし障る。」

士郎は手に持っている弁当箱を前に出し、笑顔で食事に誘った。

「…まあいいか。…分かったわ、まずはお昼にしましょうか。私としてもお昼が抜きになるのは不本意だし。」

彼女も今すぐ事を構える気は無い様で、特に文句を言うこともなく了承をした。しかし士郎の構えることのない態度にどこか調子が狂うらしく、釈然としない表情を見せていた。

しかし、士郎の弁当が視界に入ると、その表情は魔術師ではない者に変化した。

「あら、綺麗なお弁当ね。衛宮くんの妹さんが作ったのかしら？この玉子焼きなんか凄く、綺麗に渦巻きができてるわ。」

遠坂凜も、魔術師なれども青春を走る立派な乙女である。身だしなみは勿論、料理についても人並み以上に努力をしている。故に、目の前にとても色合い豊かで、一品一品が丁寧に作られているお弁当があつて、興味を持たない筈がなかった。

「いや、弁当は俺が作ってるよ。家事をこなせる人が家にいなかったから俺が小さい頃からやってたんだよ。そしたら自然と、な。あ、良かったら一つ摘んでみるか？」

直球に自分の作った物を褒められた士郎は、嬉しさと恥ずかしさ半

分半分の気持ちに挟まれ、何ともむず痒い感覚を味わっていた。

「じゃあ頂くこうかしら。んー、ここはやっぱり手の込んでそうな玉子焼きが気になるわね。どれどれ、はむ……………」

遠坂凜は口にした玉子焼きの味に、思わず目を強く見開いた。まず襲ってきたのはその食感である。玉子焼きとして綺麗に巻くことができ、かつ食感が無機質にならないように加減された、絶妙な火の通し方により、玉子は口で平等に広がりその味を舌全体に感じさせている。

更には塩と砂糖の黄金比により、塩の味の中に僅かに感じる甘みは人の味覚を喜ばせる実に理に適った味をしていた。

そして極めつけはその微量に含まれたスパイスだ。弁当の品物であるから、仕方無しにそれらは冷えてしまう。その要素を埋めるために入れられたそれは、どの部分にも均等に含まれており、味覚に感じさせる項目を増やしている。

それらの工夫は手間も掛かり難く、お金も掛からない。ただ圧倒的なまでの技術によるものだ。そんなものを口にした乙女は恐らく……………」

「……………負けた、ぐうの音も出ないくらいに負けた……………！何よこれ、一高校生が、しかも男子が作るレベルじゃないわよ……………！」

……………敗北の二文字を心にきざまれることだろう。それは大いなる悲劇、そう悲劇だ。実に憐れで堪らない。

「どうした？ひよつとして味が遠坂には合わなかったか？」

心の底より呟かれた敗北宣言は元凶の男には届くことはなく、逆に味の心配をする始末である。

「……………いいえ、とても美味しいわ衛宮くん。……………ええ、とつてもね、うん……………」

声は次第に小さくなり、士郎へと届いたのは自分の名前までだった。ガラスの如く繊細な乙女のプライドは、学校の屋上から砂の塔の様に崩れ、風に乗って彼方へと流されて行ったのだった。

「さて、一息着いたところで本題に入ろう。」

世間話に花を咲かせていた中、頃合いだと感じた士郎は和んでいた空気を自らリセットした。二人の表情は一変し、その空気は偽ることなく一触即発なものとなった。

特に遠坂凜の変化は大きかった。目が、目つきが明らかに鋭くなっているのだ。威嚇？いいや違う、それは蛇睨みと言えるほど見る者を萎縮させる眼光をしている。士郎も例に違わず、思わず後ずさりをしそうになる程、その眼は強い力を持っていた。

「今日俺が遠坂に会いに来たのは、話しをするためだ。俺はお前と争うつもりは無いってのをしっかりと伝えたいと思う。」

けれど士郎はそれに臆することなく、偽りの無い言葉を彼女へ放った。

「それは構わないけれど、それと私がどういう対応を取るかは関係無いわ。私がしたいのはね、衛宮くん。貴方がどんな理由で隠すべき魔術を学校なんて人目の多い場所で使用したのか、それを聞くことだけよ。」

言葉に野球の様な球種があるとすれば、士郎の言葉は正にストリート。ストライクゾーンを中心目掛けて全力で飛んでいく真つ直ぐな球だ。変化球などは一切使わず、曲線を描くことなく相手に自分の思いを伝えようとしている。

しかし遠坂凜はバットを振る事はなく、そのボールに目を向ける事すらしなかった。自分が欲しいコースに球が来るまで何食わぬ顔で立ち続けているのである。

そう、つまりは士郎とは違い遠坂凜には野球、もといまともな会話をするつもりは無かったのだ。相手から自分の求めることのみを聞き出すこと、辞書から言葉を選ぶのならば、それは『尋問』と言う他

ないだろう。

「それじゃ衛宮くんのお望み通り『話し』をしましょうか。まずは私の質問に答えて欲しいのだけれど？」

「わかったよ。そもそもあの日俺が魔術を使った理由は――」

彼女の剥き出しにされた敵意などは何のその。士郎は臆することはず、相手の求めるコースに全力のストレートを投げた。この場面になっても正面から挑むその心意気には、甲子園のピッチャーも驚くことだろう。

士郎は魔術を人助けに使ったこと、その無用心さに関しての謝罪、そして話しの端々に自分に敵意が無いことを彼女へ話した。

話しを聞いていた遠坂凜は終始その鋭い目つきを変えることなく、黙って士郎の言葉を耳に入れていた。

「――それで？そんな理由じゃあ私が異端者を見逃す理由にはならないわ。」

しかし彼女が出した結論は敵対の二文字だった。

「なっ、なんでさ!?!俺はお前と争うつもりは無いつて――私にはあるのよ」

士郎言葉を遮った遠坂凜は淡々と、そして冷徹に言葉を並べた。

「そもそも貴方、何か勘違いしてないかしら？確かに、私は魔術を使用した理由を説明しろとは言ったけれど、それは貴方が使った理由じゃないわ。貴方が魔術を使ったことで、私に何の得があるのかを聞いているの。私が貴方を逃がすに足る理由を聞いているのよ。理解してくれたかしら？」

そう、遠坂凜が聞こうとしたのは逃がすことで、自身に何か益があるのか。士郎へと問い掛けていたのは初めからその一点のみだった。その他の事情など全くもって如何でも良かったのだ。

士郎は間違えていた。話しをするなど夢のまた夢だったのだ。初めから相手から見て自分は獲物、あるいは害虫でしかなかったのだ。それに気付くことができなかつたのだ。

「まあ、話しの内容からして私に益なんかこれっぽっちも無さそうだし。あんたと話しても平行線のままでしようし。私も長々とこんな不毛なことはしたくない。そういう訳で、こんな面倒なことはぱっと終わりましたよ。」

瞬間、士郎は強い違和感を五感全てに受けた。それは物理的にはなく、精神的にここに居てはいけなさと感じさせるものが、今この場所に展開されたのだ。それは正に閉鎖空間の様な――

「ツツ!!人払いの魔術か!」

緊急事態により、士郎の脳は全細胞に警報を鳴らした。それにより士郎の脳内は人生でトップクラスの思考速度で廻っていた。

「そうよ、私もこんな所で魔術なんて使いたくはないけど、此処であんたを片付けた方が後に憂いを残さなくて済むわ。だからさっさと――死になさいっ!!」

彼女の指先から魔力の塊が放たれる。それは銃弾の如き速さで、士郎へと向かって行った。

「ぐがあツツ!!」

銃弾を至近距離で避けることはできる筈も無く、それは士郎に直撃した。

激痛及び退避の為、無意識にその場から転がり距離を取る士郎。そして直ぐ様立ち上がり、相手を視界に入れた。見えるのは変わらず此方に指を向ける遠坂凜の姿。士郎は即座にその光景にピントを合わせ、

全神経を集中させた。

命の危険を感じた士郎の思考は冷静なものとなっていた。如何すればこの場を切り抜かれるか、を目的とした思考へと切り替わっていたのである。しかし――

『その状態』で相手から視線を外さないのは褒めてあげるわ。腐っても魔術 士って訳ね。」

――魔術が直撃した右の肘から先は跡形もなく消え去って

いた。

痛い、痛い。痛い痛い痛い痛い。右腕より激痛が走り、全身に駆け巡る。それにより気を失いそうになるが、何とか意識を繋ぐ。

肘から先が無くなった自分の腕に触れてみる。血は止めどなく流れていた。このままでは、と思い即座に上着を脱ぎ、腕に縛りつける。

体は何故か重く、力が入りにくくなっている。遠坂から受けた魔術が原因だろうか。体調が悪くなる、か。

脳内の辞書を展開し、相手の手札を確認する。

「……もしかしてガンダか……？」

いや、しかしガンダは体調を崩す程度のものである筈だ。腕をふき飛ばす威力のガンダがあり得るのか。いや、そんなことは今はどうでもいい！このままだと間違いなく俺は死ぬ！！

死を感じるほどに思考の速度は加速していき、より冷静になっていく。脳内はこの場を切り抜ける事のみに使われ、相対的に感じる痛みはしだいに無くなっていく。

五感で感じ取れ、衛宮士郎。相手の情報を整理し、より多くの選択肢を作りだせ。俺は、まだ死ぬわけには行かないんだ。

「……フッ!!」

同調開始。心の中で呟くと共に自らの中にある撃鉄を下ろす。全魔術回路を流れる魔力全てを身体能力の強化に回す。そして間髪入れることなく地面を蹴り、遠坂に突撃する。

遠坂は俺を明らかに下に見ている。だからこそ、突然の捨て身の突撃をするなど、考えもしないだろう。その隙をつくんだ。

「なッ!? きゃあ!!」

予想通り反撃されるなど思ってもみななかった遠坂は先ほどの俺の様に、吹き飛ばされ、屋上のフェンスに身を打ち付ける。その隙を無駄にすることなく、即座に俺は校舎内へと駆け込もうと扉に手を掛け

る。

瞬間、魔術の気配を感じた。

「なっ、開かない!」

魔術により扉は、その状態で固定化された。ドアノブは回らなくなり、扉はビクともしなくなつた。つまり俺はこの屋上に閉じ込められたということだ。

「……ふん、一度巢で捕まえた虫を逃がす蜘蛛がいる筈ないでしょう? あんたが魔術師だつてわかつたときから、この学校の私のいる場所には、魔力に反応する仕掛けを設置しておいたの。」

既に体制を整えていた遠坂は、宝石を見せつけながら仕掛けの説明をした。

「本当に初めから話し合うつもりは無かつたんだな…」

ああ、何処かでまだ話せると思つていたけどようやく無理だつて理解ができた。俺は人同士だと思つていたけど、相手は俺を馬だと思つてた訳だ。だから念仏も唱える気も無かつた、そりゃ話なんて出来っこない。思えばさや だつて言つてたじゃないか、無理だと。一体俺は何を勘違いしていたんだ。

「……聖杯戦争。この言葉に聞き覚えはある? 最後にこれだけは聞いておくわ。」

せいはい、せんそう?なんだそれは、いや、けど、たしか、いつか、そんな単語を耳にしたような、気が、する。

「……僕はそのときやつと、やつと自分が正義の味方なんかじゃない事に気がついたんだ。」

爺さんは自分自身を貶す様に、呟いた。

そう、たしかあの満月の下で親父と話したときにそんな単語を、

「……それに早く気がついていれば、きつとあの聖杯戦争も違った形になったのかな。……もしかしたらアイリも、イリヤも。他の『マスター』達も、

らしくなかった。穏やかであり後悔の言葉を洩らさなかった爺さんが今宵は栓が抜けたように言葉が溢れていく。

「……『マスター』。聖杯戦争って聞いたってことはそういうことだろうか？」

ああ、思い出した。あの夜の記憶は切嗣が忘れてほしいと言っていたから思い出そうとはしてこなかったけど、そうか、そういう事なんだな、爺さん。

「……やっぱり知ってたか。本来なら聖杯戦争で他のマスターになる魔術師を倒す気だったんだけど。あたしの感が言ってるわ。あんたは、此処で消すべきと。だから、此処で果てなさい!!」

再び遠坂の指から魔術が放たれた。あのとんでもない威力の魔術が向かってくる。俺の後ろには開くことのない扉。後ろに距離を取れない袋小路に近いこの状況では、横に避けても追撃には対応出来ない。客観的に見れば絶体絶命と言うだろうこの場面。けど、この数分間に何度もあった同じ様な場面とは、明らかに違うんだ。わかるんだ。……これが危険じゃないことが。

「……格好良いところ、見せたかったんだけどな。けどそれ以前の問題だったみたいだ。」

悔しい、悔しい。自分の身すら自分で守れないことが。

悔しい、悔しい。どうしようもなくわかってしまうのが。

悔しい、悔しい。それを止めることができないことが。

悔しい、悔しい、悔しい、悔しい悔しい、悔しい悔しい悔しい悔しい悔しい!!

ああ、知ってるさ。アイツはそういう奴だから。俺を大事に思ってくれて、俺と一緒に居てくれて、俺を尊重してくれて。

だから、誰に言われなくてもわかる。きつと、いや絶対に、彼女は————

甲高い金属音が響く。方向を晒された弾丸は地面にぶつかりタイルを砕き、破片が視界を遮る。

「……………その汚い指を士郎に向けるな。」

俺を助けに来てしまうんだろう。

そこには、俺の最も大切な宝物が日本刀を構えていた。俺が守りたい宝物は、逆に俺を守っている。

嗚呼、悔しい。俺はまだ、あの時から変われないでいる。なあ、切嗣。また戦争が始まるみたいだ。

今度はあんたの立ち位置に俺は立てるのかな。

遠坂凜は妬ましい

聖杯戦争、それは文字通り聖杯を求める者たちが争い戦う、戦争の呼び名である。

それは七人のマスターとなる魔術師が参加する戦争である。

それは過去に偉業を成し遂げ、英雄として世界に記録された『英霊』たち。聖杯戦争風に言えば『サーヴァント』なる者たちをそれぞれこのマスターが召喚し、使役する戦いである。

そして勝者となり聖杯を手にした者は、どんな願いでも叶えることができるのだ。

この聖杯戦争の基盤を作ったのは、『アインツベルン』、『マキリ』、『遠坂』ら冬木の御三家の先祖たちだ。彼等がこの聖杯戦争と言う名の儀式を始めたのである。

そう、遠坂凜はその始まりの御三家の内の一つ、『遠坂』の正統な後継者なのだ。

遠坂凜は聖杯戦争に参加し、勝者となることを目指している。それは聖杯に願いを託す為ではなく、勝者となること自体が目的なのだ。それが自らの達成すべき、誇りに思える自分になるための、目標の一つなのだ。

だから遠坂凜は魔術師であることを誇りに思っている。その自分をより高める為、自分の道に立ち塞がる物は全て粉碎し、二度と自らの道に立つことの無いようになぎ倒す。そう、これもそれとなら変わらない行動の一つなのだ。疑問に思うべき点など一つもない筈なのだ。けれど――

「……………衛宮さや、ね。貴女が此処にたどり着けないように、色々仕掛けておいたからつきり来れないと思ってただけど、どうやらこのポンコツな兄よりかはできるみたいね。」

予想外の出来事にも狼狽えず、優雅に華麗に、そして大胆不適に。その笑みを絶やすことなく、彼女は『魔術師』としてその指を再び相

手へ向ける。

「……そんな魔術師であろうとするからこそ、それ故起きるジレンマ。それは昔も今も彼女の胸を抉り続けていた。」

「……すまん。手を煩わせる事になった。」

士郎の頭のギアは未だ生存を目的に、高速に回り続けている。それ故謝罪は最低限なものとなった。そう、既に彼の頭の中は衛宮さやを戦況に入れた状態で回転しているのである。

つい数秒前まではその事を心より悔やんでいたはず筈だが、今の士郎からは既にそれは消え去っていた。本人すらも理解出来ていない、その矛盾は、歪な形の歯車となり確かなブレを生み出しながらも尚も回転していた。

「……良い、私あいつ嫌いだから。」

兄に呼応するかのような淡白で直球な返答をすると、予備動作を観せずに前へと跳んだ。

「ツツ!!」

見た目にそぐわぬ動きに、遠坂凜は即座に反応できず、その逆手に持たれた刃で相手へ向けていた腕に傷を付けられた。腕からは鮮血が流れ、また屋上の紅の割合を広げた。

「……今のは警告。士郎の言った通り私たちに戦う意思は無い。……けど、これ以上彼を傷つけるなら話しは別。」

傷つけられた腕は、士郎が自分によって消し去られたのと同じ右腕だった。

「……お返してことね。けど、この私に、『遠坂』に警告だなんて身の程知らずにも程があ……」

警告に従うなど一厘たりとも考えることはなく、それならば今度は左腕を消し去ってやろうと士郎を視界に映した瞬間、彼女の思考は

完全に停止した。

　　土郎の左腕。それは肩から指までしつかりと存在している。そう、左腕に問題は無い。

　　土郎の右腕。それは肩から指までしつかりと存在している。そう、右腕に問題は無い。

　　「……」否、明らかにおかしい。何故、そこに右腕が存在しているのか。その男の右腕に問題が無いこと自体が問題だろう。

　　「……何よそれ、一体どういう手品かしら……？」

　　遠坂凜の頭は、正しく現実を捉えることを本能的に拒否した。何故ならそれはあり得ないことなのだ。いや、あり得てはいけないことだ。そう自分に言い聞かせるも、声の震えを止めることはできなかった。

　　魔術とはあくまで物事を進める手段一つに過ぎない物だ。科学とはまた別の物だが、同じ技術の一つだ。

　　だからこそ、だからこそ、科学でも不可能な事が今日の前で起きているだなんて信じられる筈がないのだ。そんな事ができるのは魔術の域を超えたこの世に七つしかない『魔法』と、宝具を持つ者にかぎられる。

　　「いや、手品なんかじゃない。この右腕は本物だ。」

　　土郎の声には『お前の攻撃は意味がない』という戦いの無意味さが込められていた。それは完全ではなくとも、遠坂凜へと確かに伝わった。初めて土郎から遠坂凜への言葉が届いた瞬間だった。

　　「……さっきまでの言葉、訂正させて貰うわ。……私のおんた達に対する評価は間違ってたみたいね……」

　　土郎との三度目の対面。彼が遠坂凜へと向ける目には、初めから変わることなく対話の意思が宿っている。変わったのはその傍らにいる妹と、……彼女自身の心だろう。

　　遠坂凜は今、自分を辛うじて律していら状態だ。兎を狩っていたつもりが、実は得体も知れないUMAだったことに酷く恐怖を感じなが

らも自分を何とか保っていた。

けれど、それも次の瞬間脆くも崩れ去った。――それが目に入った瞬間に

「ッ!!遠坂!!」

物体を破壊する轟音が辺りに響く。遠坂凜の指から再び魔術が放たれたのだ。それは明らかに人に向ける威力を超えており、屋上の出入り口を、建物もろとも破壊した。

士郎は気付いた。今、遠坂凜が冷静さを保てていないことに。同時にこのままでは自分たち以外にも被害が及ぶ可能性を示唆した。

「さや、止めるぞ。」

「……言うと思った。」

そう、士郎は此の期に及んでも話すことを諦めていなかった。しかしそれも仕方がないことだ。何故ならそれが衛宮士郎という『人間』なのだから。

さやはそれに呆れながらも断らなかった。

遠坂凜は齒軋りを隠そうともせず、二人に狙いを定め攻撃を続ける。その大砲の如き威力を秘めたそれは、放たれた方向にある物をこごとく破壊する。フェンスは弾け飛び、コンクリートは抉れ本来平面だったそれに高低差ができる程の破壊力を見せた。

自らの得物である。宝石を使わなかったのは、彼女の魔術師としてのプライドを保つ最後のセーフティーが働いていたからに他ならぬ。しかしそのセーフティーは十全に機能していない様で、このままではいずれ屋上が崩れ、学校の生徒及び教師が危険に晒されるだろう。

トリースオン
「同調開始」

リロード
「巡れ」

二人の魔術回路に、魔力が走る。強化の魔術により身体能力を底上げされた二人は人間を超えた速さで、向かってくる攻撃を避け、少づつ相手との間合いを詰めていた。

冷静さを欠いた人間は、状況の変化に対応することができなくなる。ましてやそれが二人掛かりで行われれば、尚更である。

「もうっ!! あったまくるわね!! なんて、なんであんなら兄弟はツ!!」
二兎を追った結果など、目に見えている。いくら攻撃を放とうが当たる筈も無く、痺れを切らした彼女は遂に自ら間合いを詰めようと足を踏み出した。それを二人は見逃さなかった。

人間が最も隙を見せるとき。それは動き始める瞬間だ。それを見せたときが攻めに転じる絶好の機会に他ならない。

前に足を踏み出した遠坂凜の正面に士郎は移動した。相手は予想外の行動に表情を変化させるも、それは動きを鈍らせるには至らない。

彼女は魔術師だが中国拳法、『八極拳』の使い手でもあるのだ。的が自分から動いたところで何の問題も無い。それ故踏み出した足を即座に移動から攻撃の為の踏み込みに変化させ、間髪いれずに拳を放つ。士郎たちの数段上の強化の精度で放たれた拳は空気を抉り、残像を残しながら士郎へと向かっていく。

しかしここで、冷静さを欠いた仇が彼女を襲う。目の前しか意識を向けていなかった彼女は腕を狙うさやの存在に気づかなかった。

今士郎目掛けて伸びている腕に、さやは刀の峰を向けて下から掬う様に振るった。

しかし、その刀は腕に当たることなく空を切った。遠坂凜は伸びようとしている肘の関節の内側目掛けて、もう片方の腕をぶつけたのだ。それにより、腕は伸びることなく自分の胸へと戻る。それ故伸びる腕に狙いを定めていた刀は空を切ることとなったのだ。

そしてさやの妨害を避けた彼女は、踏み込んだ足の力を緩めることなく、曲げた腕の肘を士郎に向け肘打ちを仕掛ける。

——この身は鞘でできている

「がッ?!?!」

遠坂凜の脇腹に、予期せぬ痛みが走る。気づけば自分の体ははね返

され、地面に転がっていた。痛みに咳込み、思考が動かなくなる。自分が何故このような状態になっているのか、理解できなかった。

顔を前に向けると、刀の先が視界に入った。

「勝負有りだ。」

士郎の声が戦いの音が消えた静寂の中響く。

「……私の負けよ。煮るなり焼くなり好きにしないさい。」

負けた。完全に、一分の言い訳も無く負けた。余裕も優雅さも持てなくなった時点で、遠坂凜に勝ち目は無かったのだ。そう悟った彼女はだらしなく胡座をかき、死を待った。

「……いや、何もしないさ。」

士郎の口から出たのは、そんな文字通り阿呆な台詞だった。死を覚悟した側からすれば怒りすら湧いてくるだろう。

「なっ！あんたねえ、ふざけたこと言うのも大概にしなさいよ！殺されかけた相手に対する扱いがそれだなんて……」「黙れ。」ツ！

冷徹な声が彼女の耳を貫き、言葉を止める。

「……お前は敗者、口を開くな。」

「おいさや、なんてこと言うんだよ。俺はただ遠坂凜と戦いたく無いただけなんだ。仲良くできるならそれに越したことは無いだろう？」

「……それで命狙われたら元も子もない。」

煮ることも焼かれることもなく、兄妹の口喧嘩を暫く聞かされ続ける遠坂凜。それは負けたことよりも屈辱を感じた。

結果として、遠坂凜は聖杯戦争において、他陣営の全てを倒すまで同盟を組むこととなった。一方的なものをさや希望したが、士郎の意向により実に双方に損の無いものとなった。それにより更なる屈辱を味わわれた遠坂凜だったが、これが彼女に対して最も有効な契約の形なのかもしれない。

そう、私が冷静さを欠いた原因はあの光景を目の前で、しかも動揺している状態で見せられたからだろう。

兄妹が互いに思い合い、共に行動する光景。それは私が魔術師になつて喪つたものだ。いや、魔術の道に進んだことに後悔はない。今の自分が選んだ道は間違っていないと、確信している。

けど、けれど、私と同じ道を歩く人がいた。一人で歩くことを決められた道を二人で歩いている人がいた。助け合いながら歩いている人がいた！ 私と同じ境遇にありながら二人で歩いている人がいた！私は一人名のに！！

そして、更にはその二人の意思を認めるが如く、彼の右手の甲には、聖杯戦争の参加者の証、『令呪』が宿っていた。アイツが聖杯戦争の存在を知つてももの数分の出来事だ。あの兄妹が認められると、私を否定されるように、その時の私はどうしようもなく感じてしまったのだ。

あの二人を見ると、私は自分の歩いてきた道が間違っていたように見えてくる。だからあの兄妹を倒して私は、私は自分自信の道が正解だと証明したかった。その思いはあの二人を調べている時からきつとあつたんだと思う。それが今回私の迷いを生み出した原因。

けどもう、私は自分の道に迷いを持ってしまった。きつとこのままだと私は前に進めない。この迷いを消し去る為には――

「……正面から正々堂々と戦つて、勝つ。」

きつとそれしか方法はない。遠坂凜が遠坂凜である為にはそれしかないのだ。私が選べたかもしれない道を歩く彼等を私は認められない。

「……桜。」

手の甲に宿る令呪を見つめ、感傷に浸る。今晚はこれを止めることができそうになかった。

——少女を襲うジレンマ。それは未だその手を休めることなく彼女の胸を抉り続ける。今まではその痛み気づかなかつた。けれど一度その傷を見せられれば最後、何時でも何処でも痛みは止まるとなく彼女を責め立てる。

隣の芝生は青く見えるものである。今まだ知らなくとも、これからあの兄妹を見ていくのならば、その歪さ。その手の繋がりに違和感を覚えるであろう。色々なものが見えてくるだろう。敵と自らを知ること危うさを消していく。それが当面の彼女の目標だろう。

否、既に見えているものもいくつもある。例えば、衛宮士郎の精神。あの精神は明らかに狂っている。自らを害そうとした者と、事が終われば仲良くしようとする。そんなこと人間ならあり得ない。

例えば衛宮さやの攻撃方法。彼女は、確かに見ていた。あの認識できなかつた攻撃の後、衛宮さやの腹部の服に穴が空いていた。

聖杯戦争はまだ始まっていない。

ラスボスは意外と近くにいる

「……衛宮家は危機に晒されている。それがどれだけ危機的状況かというと、対策を講じなければ自滅を招く可能性を孕んでいる程のものだ。」

しかし、それは例え彼等兄妹が、力を尽くそうと尽くすまいと必ず失うことになる。今までに何度か同じ目に遭ったのだが、やはりそれは確かに衛宮家に大打撃を与え、楔であるかの如く、今尚突き刺さったまま抜けずに兄妹を苦しめていた。

「……貴方たち、案外魔術師らしい悩み持ってたのね。」

遠坂凜から何ともいたたまれない感想が飛ぶ。

そう、体操座り。それが今の衛宮士郎のしている体勢であった。

それは遡ること一時間。遠坂凜との同盟が結成されてから、数日経ったこの日。彼等は同盟を組む上で必要な、お互いの情報を交換し合う為に授業後に、衛宮家に集まっていた。

「さて、早速本題に入りましょうか。改めて自己紹介させて貰うわ。この冬木の地を管理する遠坂家の当主、遠坂凜よ。使える属性は五大元素全て、主に宝石魔術を主装備として今回の聖杯戦争に挑むつもりよ。」

その台詞に、兄妹は少なからず驚いた。自らの魔術適正を何のためらいもなく言葉にし、更には魔術媒介すらも口にした。大胆不敵と表す他ないほど、その声には自信が込められていた。

「……なあに？ 私がここまで自分をさらけ出すとは思わなかった？」

してやったり、彼女は顔でもそう語る様にニヤニヤとした表情を二人へ見せつけた。

「そりゃ驚くさ。俺なら兎も角、魔術師がそこまで正直に話すだなんて思ってもみなかった。」

「…開き直っただけな気がする。」

「私だって普通の魔術師じゃないわ。由緒ある家系の魔術師よ。誇りを捨ててまで契約の裏をかこうとは思わないもの。後、妹の方は黙ってなさい。」

さやに反応したあたり、開き直った部分もあるらしい。それで良いのか遠坂家よ。

「それじゃあ、遠坂も腹を割って話してくれただ、俺たちも正直に話そう。俺は衛宮士郎、趣味は家事全般、使える魔術は強化と投影が少なくてところだ。属性の適正はない。それでも鍛錬は欠かしてないんだけど、どうにもへっぽこは卒業できてない。」

士郎の言葉からは、自分が普通以下の実力なことに悔しさを感じているのが伺える。そう、衛宮士郎には五属性全ての適正が無く、これといった魔術は強化しか使えないのだ。

「へっぽこってあんた、あの時一瞬で腕生やしてたじゃない！あれんなのしておいて、どこがへっぽこなのよ！」

先日士郎が見せたあの魔術の域を超えた回復性能。あれは凡才が出来ることではない。なにかタネがあるはずなのだが、

「…いや、正直俺自身なんであんな事を起こせたのか分かってない。ただ、俺は昔から怪我の治りがとんでもなく早いみたいなんだ。」
「どうやら、そのタネが自分でも見つけられないらしい。」

「…あたし、こんなのに負けたの…？ちよつと恥ずかしさで死にたくなってきたんだけど、」

「なんでさー！」

その場で顔を覆い隠す凛に、思わず突っ込む士郎。あえて遠坂凛の肩を持つとすれば、彼女の属性である五大元素エレメンツだが、これは魔術師の世界で天才中の天才と言い切れるほど素晴らしい才能だ。更にはそ

れに劣ることの無い確かな努力を彼女は積んできている。そんな自分が、落ちこぼれもいいところな士郎に負けたとあれば、そのシヨックも大きくて当然なのだ。

つまりは相手も知らず、自分も知らぬ者が戦いを潜り抜けた訳だ。これには孔子であつても驚くことだろう。

「…士郎は冷静。貴女はそうじゃなかった。…それだけ。」
「うぐツッ」

的確な毒づきに胸を抑える遠坂凜。実際その通りなのだから、何も言い返せないのも仕方ない。

「…けど、二人のその言い方だと俺は魔術師として赤子も同然って風に聞こえるんだけど……」

態々聞かなくても良いことを、口に出してしまった士郎。これへの返答などは予想するまでもなく――

「勿論」

「……なんで、さ……」

先ほどの毒づきの威力を超える毒針が、士郎の胸に突き刺さる。あれだけ犬猿の仲に見えた二人だったが、今回に関しては見事に一致した。藪蛇とは正にこの事だろう。

改めて自分の弱さと女の恐ろしさを感じた士郎であった。

閑話休題

「……衛宮さや、衛宮士郎の妹。趣味は刀剣の収集。属性は基本無し。…使える魔術は強化のみ。体質的に魔力を外に放出できない、例外として刀剣の類いには流すことが可能。…以上。」

彼女は実に簡潔に、そして淡々と自己紹介をした。いや、寧ろこれは自己説明といった方が適切だろう。彼女の表情は基本変化することとはなく、態度も然りだ。ただ、純日本人的な腰まであるきめ細かい黒髪と、健康的でスレンダーな体つき、そして何よりも整った顔により、結果的な印象は『美少女』に落ちつく。

余談だが、割と才色兼備な為、男子からの好感は高いのである。し

かし本人の関心はすべて兄へと向けられている為、本人はそれを知らない。

「ちよつと待ちなさい、まだ説明不足な点があるわ。貴女、強化の魔術だけしか使えないって言ってたけれど、それだとあのときの私への攻撃手段の説明がつかないわ。」

そう、あのとき凜を襲った不可視の攻撃。それを強化による高速の攻撃と言うのは無理があるだろう。他にも何か戦闘に使える手がある筈なのだ。

「……ちっ」

「今舌打ちしたわね!!したでしよ!絶対したわ!!全くもう。油断も隙も無いんだから。正直に説明してくれるかしら。」

またもや一悶着。女の仲の悪さとは男のそれとは大きく違う。男の士郎は見るだけで事が起こりそうで気が気でない様子。

「…質問に答える。魔術と呼べるかは不明。私の身体は刀剣の類いを出し入れすることが出来る。…故にそれが攻撃方法になる。」

「……つまりあの時の攻撃は、貴女の身体から飛び出してきたものだった訳ね。けど、そんな物が限定された魔術なんてあり得るのかしら…」

卓越した魔術師である彼女も、これを魔術と言って良いのかは微妙なところであるようで、なんとも言い切れずにいた。

「まあいいわ、そこは後でも考えられるし。それよりその能力についてだけど、実際のどの程度なのか見ておきたいわ。」

「……別に構わない。百聞は一見にしかず。」

「さや!?!待て!それはっ!!」

士郎の制止はなんの意味もなさぬまま、金属音が鳴り、空間を揺らす。気がつけばさやの右腕には刀が握られていた。

「……実際に見てみると聞くのとは違った印象になるわね。これ、本当に身体から出てるわ。」

そう、刀の刀身は完全には抜けておらず先が右腰の中に入っていたのだ。しかし、身体に刺さっている訳ではなく、あたかも某絡繰^{ドラえもん}青狸

のポケットの様に、三次元的空間を無視してそこに存在していたのだ。

「ってどうしたの衛宮くん？さっきは大きな声出して、今は頭抱えて。」

ここで士郎について改めて説明するが、彼の性質上家庭において彼はいわゆるオカンなのだ。オカンなりえる原因は料理、家族へのお節介、洗濯、裁縫などがあるが、「節約」という要素もある。

「そりゃ頭抱えたくもなるさー！見てくれ遠坂、さやの制服が破れているんだ。制服一着、上だけでもどれだけ掛かると思う？下のシャツとブレザーで十万近くするんだぞ！まだ新品だったのに…」

今月の予算からして何処を削るべきか、いやけど栄養を考えると食事からは削れないし、かといって電気水道を節約しても高が知れている。また切嗣の遺産から算出するしかないか。けど、こんなの繰り返しでたらいつかは無くなる。どうにかして解決策をーーーー

士郎の脳内の経理システムがフルに回転し始めた。速度は戦闘のときのそれと違わない。いや、寧ろこちらの方が速いのもかもしれない。しかし、凜に話していた筈がいつの間にかやら自問自答になっているあたり、暴走しているとも見える。

「…たまにこうなるの？」

「…私が服を破るといつもこうなる。」

「破らないような努力はしないの？今回もわざわざ布地のある腰から出さなくても良かったと思うけど。」

「…真剣使うときの癖。刀抜くとき、無意識に腰に手を伸ばす。」

「…すつとぼけた部分は衛宮くんだけじゃなくて、貴女にもある訳ね。」

真剣に考えている本人そっちのけで、世間話の様なテンションの女子二人。凜は兎も角。さやはあたかも他人事の様な口振りである。

「…悩んでも仕方ない。此処、藤村組の集会所と思われる。だから偶に武器持った人、入ってくる。」

衛宮邸は敷地は広く、造りも和風。部屋の数は二人では到底使い切れない程あり、庭まである。そして極め付けは藤村組の存在である。

衛宮邸には食い扶持がもう一人いる。その名も『藤村大河』 冬木の虎、タイガーとも言われる彼女は、士郎達の通う高校の教師なのだ。が、此処では教師らしきは全く以って皆無だ。

自分勝手、悠々自適、唯我独尊、鯨飲馬食。嵐の様に來て嵐を起し、また嵐の様に去っていく。そんな好き勝手なことをしていても、どこか憎めないし、姉の様に衛宮兄妹を見守ってくれる。これはもうタイガーとしか説明しようがない現象なのである。

「……年に数回ここに宴会する。馬鹿騒ぎで噂立つ。」

そして衛宮邸にて開催される藤村組の大宴会。長である藤村雷画を初めとした雄々しい面々は衛宮兄妹を、特にさやを大変可愛がる。その為無碍にも出来ず、甘んじて迫り来る火の粉は受け入れねばならないと兄妹は思っているのだ。

余談だが、衛宮兄妹は藤村組より剣道の手ほどきを受けており、それ故に荒事に対する自衛方法を持っている。特にさやは飲み込みが早く、今や有段者である。……真剣の使用を認められた訳では無いのだが、まあそのこの辺りは教えた人が人なだけにお察しだろう。

「藤村先生、やっぱり只者じゃないと思つてたけど、そっちの世界の人だったのね……」

「……勘違いしないで。大河は組長の娘なだけ。」

藤村大河が危うくヤクザと思われそうになつていたので、さやは止めた。余り感情的にならないさやが、他人の誤解を解こうとしているところに、少なからず凜は驚いた。

「貴女も信頼できる他人（人）いる訳ね。それより衛宮くん、いつまで考え込んでるのーってどうしたのよ!? そんな姿勢とって!？」

体操座りをしながら顔を下に向ける士郎。しかし、先程からの眩きは途切れてはいないようで、未だに節約の方法を考えていた。

「……士郎、もうどうしようもない。諦めるが吉。」

先ほど士郎を『オカン』と例えたが、その要素として挙げ忘れていたものがあつた。そう、疲れの蓄積だ。諸兄らも人の子ならば見たこととはあると思うが、オカンとはなにかとストレスを溜めやすい。気にすべき要素が多過ぎれば、限界がくる。そして大抵は金銭という解決

の難しい物が引き金になるだろう。——オカンも万能では無いのだ。

「……貴方たち、案外魔術師らしい悩み持ってたのね。」

そして、冒頭に戻ってくる訳である。

お金の問題は凜も宝石魔術という金の掛かる魔術を使っているの
で、共感する部分はあるらしい。要するに、ラスボスは意外と身近
にいるということである。

この後少しばかり傷の舐め合いがあったとか無かったとか。

「まあ、取り敢えずはこれから宜しく頼むわよ？もう直ぐ聖杯戦争
は始まるんだから。」

「ああ、こちらこそよろしく頼む。」

士郎と凜は握手を交わし、改めて戦線協定を結ぶ。その取り合う双
方の手の甲には、聖杯戦争の参加者の証である『令呪』が宿っていた。
そう、これが双方に有る限り、彼等は味方でもあるが、同時に敵でも
あるのだ。特に士郎はその事実を重く受け止めた。

「貴女も宜しく、衛宮さん。ってこの呼び方紛らわしいわね。何か
良い呼び方ないかしら。」

「……さや で良い。回りくどい呼ばれ方、好きじゃない。」

「そう、わかったわ さや。正直戦力としては兄より期待してる
わ。」

なんでさという抗議の言葉を無視して、彼女等の同盟もここに結ば
れた。

「けど、確かにそうね。回りくどいのは私も好きじゃないの。だか
らここではつきりと言わせてもらうわ。確かに衛宮くん、貴方は信用
に足りる人物だし、きつとこの同盟も良い形で働くと思う。け
ど—————」

彼女がその言葉を口にしたその瞬間、

彼等の『運命』^{fate}は確定した。それは同時に彼等の間に、決して切れることはない硬い縁ができた瞬間でもあった。

「……………私はこの聖杯戦争の最後、絶対にあんた達ともう一度、真っ正面から挑むわ。そして私自身を証明するの。これはその宣戦布告よ！」

士郎の受け止めたそれは、早くも現実のものとなった。故に、彼は凜の確固たる意思を、正しい形で感じ取ることが出来た。

確かに彼は人が傷つくことが嫌いだ。だから彼の今までの人生の大半はそれを止めることに注がれてきた。しかし、今感じ取った遠坂凜という魔術師の、全てを乗せた意思を止めようとは思わなかった。何故か、そう言われると彼自身返答に困る。けれど、彼女とは正面から向き合いたい、確かに士郎はそう思ったのだ。

「ああ、俺はそれを拒まない。」

「……………そう、感謝するわ。ありがとう、受け止めてくれて。」

奇妙な同盟関係がここに生まれた。凜は一方的な因縁を果たすため。士郎たちは聖杯による人々への被害を止めるため。目的はまったく利害どころか邪魔になりかねない双方だが、なぜだか上手く噛み合っていくように思える。

しかしながら、彼等が噛み合おうが合うまいが、着々と聖杯戦争はその幕は上がり始めていたのだ。

「……………」

衛宮さやは衛宮士郎を穢すモノをユルサナイ。

始まりの夜にて

夜風がふいていた。冬の寒さを運ぶそれは、遮蔽物のないこの場に確かな音を響かせている。屋上のフェンスに手を掛け校庭を見下ろすと、木々や掲揚塔が揺られていることから、それはこの夜に確かに存在しているようだ。

「……これで一通りは回りきったわ。どうかしら、頭に入った？」

私の傍らには誰もいない。けれどそれはあくまで一般人から見た場合の話だ。私の言葉に答える為に、それは虚空より姿を見せた。

「ああ、ここら一帯の地図は全て頭に叩き込んだ。狙撃できるポイントも既に割り出してある。しかし、良かったのかね？」

自信のある言葉を返したその男。赤い外装に身を包んだその男は、その長身により見下ろす形で今度は此方に質問を投げかけてきた。

「良かったのかって何が？」

「こんな夜更けまで無防備に出歩いていることだ。私一人に地図の一つでも渡せば、済んだだろうに。」

「それは駄目よ。その場に言って補足しなきゃいけないことがあるし、それに私自身籠ってるのは好きじゃないの。」

「……君がそういう人物ということは、先の会話で分かっていたが、いささか迂闊過ぎる。」

男は顔に手を当てる仕草をし、遠回しに仕方がない奴だと言った。私からすればお前こそ全く失礼な奴だ、と言ってやりたいところだ。

「何よ、私の目的に何か文句でもあるのかしら？」

「いいや、ただ呆れただけだ。君がマスターな以上、例え君が負けた相手にリベンジをするためにこの戦争に参加したとしても、私は君に従うさ。令呪まで使われてしまったのだからね。」

男は私をからかうように次々と皮肉った言葉を口にする。その台詞と共に鼻で笑うものだから、余計にイラつく。

「……あら、随分と言うじゃない。それは私をマスターだと踏まえた上で言ってるのよね？昨日からだけど貴方、少しサーヴァントとして

立場を弁えるべきじゃないかしら?」

「ふむ、マスターとして認めるとその昨日に、私は口にしたと思うのだがね。」

「その口の利き方が立場を弁えてないって言ってるのよ!何!?アンタ私に喧嘩売ってるの!?それならそうと早く言いなさいよ、令呪のもう一つぐらい使ってやるわよ!」

右手の甲を出し、男へと向ける。本来なら三つに分かれている筈のそれは一角欠けていた。

つい昨日。私はサーヴァントの召喚をした。そう、この戦争の要となる重要な存在だ。過去、現在、そして未来から呼び出される彼等はこの地上で何かしらの功績を残した『英霊』だ。人類の歴史という広い範囲の中でも強い輝きを放つ彼等を、私たち七人のマスターは引き連れ、戦う。

勿論彼等『英霊』たちにもピンからキリまでいる。戦いに向いている者、向いていない者もいる。だから、召喚するサーヴァントというのは大変重要なのだ。そういう訳もあり、気合を入れていた私なのだが、お父様が遺した課題を解いた影響で家中の時計が一時間早くなっていたことを忘れていた。

結果魔力の高まりのピークを逃した私は、盛大な音を立てこの男を召喚した。

「お、落ち着けマスター!私も少し口が過ぎたようだ、謝ろう。」

「ったくもう!何か私に恨みでもあるの?態々人を怒らせるような真似して。」

「恨みがあるわけではないが、聖杯手に入れる気は無いなどと言われたら、私でなくとも文句の一つも言いたくなるだろう?そのマスターが迂闊な行動をしたのなら尚更だ。」

この男、アーチャーを召喚した後、一悶着も二悶着もあつて令呪をこんな序盤で使うことになったりもした。そんな次の日の今日、学校を休み戦争の舞台になるこの街をアーチャーに案内していた。

「だって本当にそうなんだもの。貴方も嘘よりか正直な方が良いで

しよう？それに私は最優先事項がそれって言っただけで、別に聖杯を気にしないとは言って無いわ。」

街を回っている途中、アーチャーに聖杯戦争に参加した理由を聞かれた。私に特に嘘を言う必要は無かったから目的を正直に話した。

”絶対に倒したい相手がこの戦争の参加者にいるの”

最初は自分の実力を試すためだけだった。けれど、今は違う。子供みたいかもしれないけど、あの二人に勝って自分を正当化したい。それだけだ。

「しかしその相手と同盟を組んでいて、更には最後の二組になるまで挑めないと来た。……私でなければ君を見捨てていたところだぞ？この程度の愚痴は言わせて欲しいものだ。」

「それは素直に感謝してるわ。だからそれに応えようとも思ってる。だから改めて言わせて。」

やれやれと、口にしながらも私と共に戦い抜こうとしてくれる彼に感謝はとでもしている。だからこそ彼には伝えなければならぬだろう。

「……この戦争の勝者になりましたよう、私たち二人で。」

アーチャーは少し目を丸くした後、またニヒルな笑みを浮かべて、「言われるまでもない。」と言ってくれた。

そろそろ本格的に夜が舞い降りてくる時間だ。街のは明かりは更には無くなり、人の気配も消え始めるだろう。今日はもう引き上げるべきだろうと、帰路に着こうとしていた……

……刹那。夜風が止んだ。

「よお、嬢ちゃん。話しは済んだか？なら、次は俺とちつとばかり付き合ってくんねえか。」

ただならぬ気配と共に姿を現したのは、蒼に染まった外装の男だった。その野獣の如くギラつく瞳は、既に私たちへ焦点を合わせていた。つまりは敵のサーヴァントが現れたということだ。

「どうやらお出ましのようだ。マスター、指示を。」

そんなの決まっている。私は逃げも隠れもしない、挑まれたのなら迎え討つのみだ。それにこの展開を予想してなかった訳じゃない。

「アーチャー、私が自ら外に出た理由はもう一つあるの。それはね、貴方の実力をこの目で見るためよ！」

「フツ、了解した。その目で私の力を見極めると良い。そこの青いの、君もそれで構わないだろう？」

挑発をする様に、アーチャーは相手に笑みを向けた。そして同時に魔力の高まりを感じた。

湧き上がった魔力が空気を穿ち、夜は一瞬で嵐の夜に姿を変える。相手の男からも同様に、魔力を高め今にも襲い掛からんとしていた。

「んじやまあ、お手並み拝見ってことで、やり合うとするか、ねッ!!」

その男は槍を手に持ち、目にも止まらぬ速さでアーチャーへとその矛先を向け飛びかかる。その軽い台詞とは裏腹に、込められている殺意は濃厚で、私は思わず後ずさりしてしまった。

けれど、アーチャーはその不敵な笑みを絶やすこと無く、いつの間にかその手に握られていた短剣で、それを防ぐ。

「へっ、この俺と正面からやり合おうってか。面白い、そのチンケな得物で防げんのか!？」

「それは打ち合えば自ずと分かるだろうさ。」

人類の枠組みを超えた神秘同士の激突が、今始まった。

魔術工房っていうのは魔術師にとって、命より大事な研究成果が隠されているもので、自分以外の者は一切入れないようにしてあるものらしい。

「……召喚、此処が最適。」

いつも魔術の鍛錬をしている蔵。そこでサーヴァントの召喚を、俺たちは始めようとしていた。他の魔術師の前で魔術工房なんて大層

蔵に声が響く。詠唱の続きを紡ぐ中、俺は思考の海に沈んでいた。俺がこの戦争に参加する理由。それは聖杯を手に入れて、願いを叶えることじゃない。寧ろその逆、願いを叶えさせないことだ。あの夜、切嗣は言った。“聖杯によって大火災は起こされた”と。

改めて考えてもみれば、態々聖杯に大火災を起こさせる奴なんていない筈だ。魔術師ならばより生産的で効率の良い願いを託すだろうし、仮に破滅を願うとしても火災で済まずだなんて、些かスケールが小さ過ぎる。

ならば大火災は聖杯の何らかの不具合によって起こされたと考えべきだ。

そして今回の聖杯がそれを起こさない保証は無い。ならばそれは何としても阻止しなくてはならない。もう二度とあの地獄をこの冬木で生み出させる訳にはいかない。それが俺の、あの火災で生き残った俺の『使命』だと思う。

俺はあの日から憧れていた。あの日の切嗣に。人を救うことが出来る切嗣に憧れ、同時に嫉妬していた。あの日の俺は、誰も救えなかった。助けを求める人も、倒れている人も、さやも。俺はあの時の切嗣の様に、誰かを救える『人間』になりたい。さやを守る『人間』になりたい。

もう、誰も助けられない自分は嫌だ。あれから10年、できる限りの努力はしてきたつもりだ。だから、だから今度こそは！

決意に呼応するかの如く、身体から大量の魔力が放出されていく。それにより床に描かれた召喚陣は強く発光し、魔力の循環は更に速くなる。

「……………抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ!!」

瞬間、目をも思わず覆う程の輝きが発せられた。神々しさすら感じさせる白き光は、いつも光の入らないこの場所を強く照らした。

視界が元に戻る。突然の出来事で思わず尻餅をついていた俺は、見上げる形で『彼女』を見た。

「……………問おう、貴方が私のマスターか。」

彼女がその身を鎧で包んでいるのを見る限り、きっと騎士なのだろう。けれど騎士には明らかに不相応に感じる余りの美しさ。まるでおとぎ話に出てくるかの様なその姿は、寧ろ妖精か何かじゃないのかと感じさせる。

その翡翠色の瞳は真つ直ぐに俺を捉え、見つめ続けている。強く凜としたその眼に俺は酷く既視感を覚えた。――――そうだ、この眼は鏡に映る自分自身の眼。変わりたい、変えたい。そんな思いをことを心に誓うとき、俺の眼は決まってこうなっていた。

「――――ああ。」

感嘆の息を吐いたかの様な応答の音が口から自然と出た。理解の追いつかないこの状況に、俺は心の籠らない返事をする事しか出来なかつたらしい。

きっと忘れない。この先どんな喜びや悲しみがあつたとしても、この言葉にすることができない感動を俺は忘れることはないだろう。絵画の如く美しいこの光景を忘れることはできないだろう。

――――この日、俺は運命に出会った。

描くは二つの朱槍

時間は少し飛び、場所は居間。今現在、我が家では前代未聞のことが起きていた。

「貴女はマスターの妹君だと聞きましたが、参加者では無いのでしょうか？席を外していただきたい。」

「……一緒に戦う。士郎と決めた。」

「魔術師は基本一子相伝と聞きます。故に貴女に戦闘能力があるとは思えない。危険だ、ここで貴女は降りた方が良い。」

「……私、戦える。士郎よりも強い。」

「口だけならば幾らでも言えます。」

「……論より証拠。その目で確かめれば良い。」

場の雰囲気は段々と戦場のそれになっていく。一触即発のこの場を作っているのは、ものの数分前に初めて会った筈のさやとセイバーだった。

そもそもの発端は、セイバーにさやを紹介したことだ。今しがたもセイバーが言った通り魔術師の家系というのは、兄弟がいても一人にしか教えない物らしい。だからもう片方は一般人として育てられるらしい。つまりセイバーには さやが兄を心配している妹にしか見えないうみだ。

「ここまで忠告しても退かないというのなら、貴女の言う通り私自身の目で確かめるのも、吝かではありません。」

正に売り言葉に買い言葉。居間でお茶を片手に座っていた筈の彼女らは、その場に立ち上がり戦意を燃やし始めていた。……二人とも俺の為を思ってくれているだけあって、止めるわけにもいかない。

なんだか胃がキリキリと痛む。俺には乾いた笑いをするしかできなかった。

二人の足が道場へと向こうとしていたその時――

「っ!?マスター！近くでサーヴァント同士の戦闘が起きています！指示を！」

あたかも第六感に何かを感じたかの様に、セイバーはそれを言葉にした。指示を仰がれるも、突然のことに俺の思考は瞬時に働いてくれなかった。

セイバーを召喚する前に覚悟は決めたつもりだった。けれどいざ生を賭けた戦いが始まっていると聞かされると、思わず尻込みしている自分がそこにいた。

「……土郎、」

不意に右手に暖かい感触を感じた。そう、手を握られていた。誰かなんて言葉にする必要も無い。ああ、そうだ。覚悟は俺一人でものじゃなかった。

「セイバー、場所は分かるか？」

「この街の地形を詳しくは知りませんが、気配の様子からある程度広い場所で戦っているようです。」

「方角は？」

「気配はこつちから感じます。」

セイバーが指差す方角に開けた場所は一つしかない、そう……

「……学校だ。」

「……27本。」

戦いの最中、不意にランサーが呟いた。

「俺が破壊した剣の数だ。おい弓兵らお前の得物は随分と数があるみてえだな。いいぜ、名乗れよ。お前どこの英雄だ？俺の知る限り弓兵でそれだけの数の剣を持っている奴は一人もいねえ。」

英雄同士の戦いは熾烈を極めていた。互いに寸分の狂いもない、英雄に相応しい技量を持っていた。ランサーのその俊敏さは一切相手を懐に入れさせず、絶え間無い攻撃をアーチャーに放っていた。

しかし、アーチャーの両手にある短剣をいくら弾いても次の瞬間には新たな剣が握られていた。それには流石のランサーも予想外だったのか驚いているようだ。

宝具というのは基本各サーヴァントに一つだ。ライダーでもない限り、いやライダーでも十を超える数の宝具は持ち得ない。しかしアーチャーはそれを可能としている。ランサーと同じく私も驚きを隠せなかった。

「生憎君の様に高名な英霊ではなくてね。恥ずかしくて間違っても口には出来ないな。」

一貫して人を小馬鹿にする話し方を止まないアーチャーに、ランサーは次第に機嫌を悪くし始めていた。

何度目かの対面。初めと変わらぬ構えを取るアーチャーに対し、ランサーは今までとは明らかに違う雰囲気纏っていた。

「……ほう、その口振りを察するに、俺の真名に心当たりでも？」

ランサーの身体から威圧感とでも言うべき魔力の高まりが起きる。姿勢は低く、槍の矛先は下向きに。けれどそれは確実にアーチャーへと向いていた。

「その神がかった槍さばき、そしてその眼光。私の知る神話伝説の中でその二つを持つ英霊に私は一人しか心当たりがない。……ランの猛犬。」

「……真名、それは文字通り英霊の本来の名前だ。それが露見すれば、その英霊の強みも弱みも知られることとなる。それがどれだけのアドバンテージになるだろう。」

その圧倒的優位に働く情報を、アーチャーは見抜いたのだ。

「……よくぞ俺の正体を知りながらその言葉を口にした！その蛮勇とも呼べる貴様の覚悟に此方も確かな敵意を送ろう！」

本能的な恐怖が私の身を襲う。ランサーの放つその眼光が今までにない程鋭く、かつ大きくなる。眉間に皺皺ができる程見開かれたそ

れは私ではなくアーチャーを見ていた。しかしそれは余りにも濃厚な死のイメージを孕んでいて、その後ろにいる私にまで影響を及ぼした。

けれど足は震えなかった。もう覚悟はしてある。あの二人を倒すまではこの足の歩みを止めないと誓った。それに私は信じている、この皮肉屋な自分のサーヴァントを。

「アーチャー!! 命令よ!! 貴方の全力を見せて!!」

「……その言葉、確かに聞き入れた! 此処に君のサーヴァントが最強である証を立てよう!!」

この場に二つ目の魔力の高まりが起きる。ランサーにも劣らないそれは今放たれようとしていた。

「いくぜ、そっちも全力で来な。この一撃、手向けとして受け取るがいー……!!」

膨大な魔力を纏った槍は色を赤から紅へ色を変え、怪しげな気配を放つ。それが今アーチャーへと向かう。

「……『刺^ゲし穿^イつ死棘^ボの槍^ク』

瞬間、私は妙な感覚に襲われた。それはまるで、世界の法則がひっくり返ったかのような、到底信じられない景色が私の目に写った。

二人の距離は数メートル離れている。なのに、ランサーの手に握られている槍は、が既にアーチャーの胸に当たっている様に感じた。

何を言ってるのか私にも分からないけれど、確かに私の五感は既に槍が当たっていると、訴えている。そう、それはつまりアーチャーの心臓に、槍が刺さっているということにー……

甲高い金属音が、響く。ぶつかり合ったことにより響いたそれらは、まるで共鳴しているかの様に、全く同じ音を立てた。……聞こえた音はそれだけ。肉体に突き刺さる音も、身体を引き裂く音も、私には聞こえなかった。

「……おいおい、一体全体どういう冗談だ？ 流石に訳を話して貰わねえと、俺も引き下がれん。」

「私が言えることはただ一つ、君が見た物は真実ということだけだ。」
「……二人は何の傷も無く、其処に立っていた。そう、両者共にお互いの攻撃を防ぎ切ったのだ。」

「違うッ！俺が聞きたいのはそんなことじゃねえ!!俺が聞きてえのは何故貴様がその槍を持っているかだ!!答えろ弓兵ツツ!!事と次第によつちやありとあらゆる手を使ってお前を破滅させる!!」

今までに無い程声を荒げるランサー。それもその筈だ。何故ならアーチャーが今手にしているのは、ランサーがその手に持つ呪いの朱槍『ゲイ・ボルク』と瓜二つ、いや全く同じなのだから。

そう、おそらくあれは因果逆転の呪槍。心臓に突き刺さる結果を基に、槍が飛んでいく。一度放たれば最期、回避は愚か心臓から逸らすことすら不可能だろう。そんな世界の理をひっくり返すような宝具をランサーは所持している。しかし、アーチャーはそれを防ぎきった。

一体どんな方法で？因果を逆転させる槍を弾くなんて同じ槍でしか……!!??

「……まさか、ホントに同じ槍……?」

そんなまさか、だってアーチャーのサーヴァントが槍の宝具なんて、いや、けどそれ以外に説明が……

私の思考は堂々巡りに陥る。アイツの真名の知らなければならぬ理由がまた一つ増えることになった。

「……………」

ランサーの質問に、アーチャーはさっきのようにぼやかす訳でもなく、何も答えなかった。

「……一つ答えろ。その槍、墓荒らし紛いの真似をして手に入れたわけじゃあるまいな?」

その槍の切っ先を降ろすことなく、ランサーは問うた。その鋭く獣の如き眼光は、未だアーチャーに狙いを定めたままだ。

「……ああ、決して戦士の尊厳を穢してはいない。」

左右対称。ランサーの構えと寸分の狂いもなく、その槍をアーチャーは構えていた。

「……………ふん、興が冷めた。今夜はここまでだ。」

不意にその槍を降ろし、ランサーは私たちに背を向けた。

「じゃあな嬢ちゃん。またやり合おうぜ。」

そして後腐れのない言葉を残して去っていった。

この場に残ったのは私たちと夜の静寂だけだった。

鞘の由縁

夜は未だその姿を隠してはいなかった。静寂と同居するようになる夜の争いなど、一般市民は知るよしもなく。夜は平等にその暗がり人を人々に与えていた。

蒼い装いをした男、ランサーは自らがマスターの元へと戻らんとその夜を駆けていた。戦闘をひとまず終えた彼だが、その内心は晴れやかさや爽快感とはかけ離れていた。

ケルト神話より語られる勇士の中の勇士、クー・フリーンである彼は、今回の聖杯戦争に闘いを求めて召喚された。しかし、今に至るまでその目的は十全には叶えられていない。純粹なる闘争の熱さと、本能のままに動くある種の快感を求める彼は、それとは裏腹にいつも策略の隣にあった。それは死後となる此度も変わることは無かったよ
うだ。

自分を召喚したマスターは今のマスターに殺され、更にそのマスターには、『全てのサーヴァントと闘え、されどとどめを刺すな』と訳の分からない命令を令呪で従わせられた。挙げ句の果てには、目的と
していた闘いにまでケチが付いた。彼に訪れる事柄は全て悪く働いていた。

けれども歴戦の英雄である彼は、その不満と仕事とを混同すること
はしない。何故ならそれが己のプライドでもあるからだ。そんな誇り
高き戦士は滞りを持ちながらも今宵は己がマスターの元へと、報告
に向かっていたのだ。

しかし、そんな彼は見てしまった。そして『好敵手』としてソレを
捉えてしまったのだ。

夜の街を駆ける中、ふと視界に入ったのは三人の人影。1人は青
年、1人は少女、——そして1人は女騎士。

彼は血がたぎるのがわかった。彼は自らの瞳孔が開くのがわかつた。

召喚に応じて永らく得ることの出来なかつた闘争の感覚。この女
ならばそれを感じさせてくれるだろうという確信が、彼にはあった。

しかし、今宵は既に己が朱槍の真名を開放している。本来ならばこれ以上の鬪いは避けるべきだ。だが、既に自身の眼はその女を相手として捉えていた。そしてこのクランの猛犬とも呼ばれる彼は、捉えた獲物を逃すほど甘くもなかった。

もし、召喚されてから1度でもまともな戦闘を行っていたならば、その昂りを抑えられただろう。もし、令呪による後押しが無ければその興奮を鎮められただろう。しかし、それはたられればの話。

結果、いくつもの要因が重なったことにより、今宵の冬木にもう一つ闘争が起きることとなった。

さあ、そこに獲物はいる。男は、英霊は、その槍を伴って今、鬪いを始めんと彼等の前に姿を現した。

◇

学校で発生していた戦闘が終結した。その報告をセイバーから受けた土郎。彼等は目立つことを避け、できる限りの最高の速度で学校に向かっていた。しかし、学校まで残り数分というところでその事実を耳にすることになった。

「準備に時間を掛け過ぎたのが失敗だったか……」

「いいえ、私たちは最善の行動をしました。時間を優先していればマスターの身の安全が確保できませんでした。故にこれは致し方ないことかと。」

土郎は思わず拳に力を入れた。そう、最善の行動をした結果であったとしても、敵の姿を確認できなかったのはとても大きい損失なのだ。

「……でも、敵の姿……わからない。学校……危険。」

「ええ、貴女の言う通りです。今回の戦闘において、最も重要な点は学び舎でそれが起きたことです。」

二人は頷いた。何故、起きた場所が重要なのか。聖杯戦争のしくみ上、戦闘が起きる原因は限られてくる。

散策していた陣営同士が出会う場合、敵の工房へ攻めに行く場合、

そして待ち構えていた敵と遭遇する場合だ。

「……学校で鉢合わせ……普通、あり得ない。」

「ああ、きつとどちらからのマスターは学校の関係者、それか学校にマスターがいることを知っている奴だ。」

もちろんのことだが、学校に縁のあるマスターはいる。そう、遠坂凛だ。しかし彼女が無断で、ましてやこんなあからさまな方法を取るとも思えない。そう士郎は考えた。

「……正体を知らないままは……学校、危険。」

明日以降、敵がいるのを知っているにも関わらず学校に登校するのはとても危険だ。そして、敵の姿を知らないとなれば尚更のことだ。「明日からどうするか、また考え直した。」

結論としては学校は危険。士郎たちにはそれしか分からなかった。彼らは少し落ちた気分のまま、帰路に着くこととなる。

しかし、運が良いのか悪いのか、その不安は解消されることとなった。

最初に気付いたのはセイバーだった。

「ツ!!マスター!私の後ろに下がってください!!」

頭上から来る飛来物。それは音速を超えていた。音を置き去りにするそれをセイバーは剣で受け止めた。

「ツぐ、ハァー!」

魔力放出。セイバーは己がマスターから敵を引き離すために、馬力を上げる。不可視の剣を振り切り前方へ弾いた敵は、平然とその勢いを殺しその姿を見せた。

「……よう、突然ですまなかつたな。少し気が立ってたのもあるが、目の前にアンタみたいなのがいて、思わず手が出ちまった。」

朱色の槍を持った青い外装の男。セイバーはもちろん、二人にもそれが人間ではないことが理解できた。

「セイバー!大丈夫か!」

「はい、私は問題ありません。それよりもマスター、敵のサーヴァントです。貴方達はもつと後ろへ!」

セイバーは己の直感が警報を鳴らしているのを感じた。目の前に

いる相手は、一流のサーヴァントだ。二人を狙われ守れる自信はない。

「ああ、安心しな。後ろの二人を狙うつもりはない。目的はあくまでお前だ、セイバーのサーヴァント……！」

セイバーの視線から察したのか、ランサーはそう答えた。しかし、その眼光と好戦的な雰囲気はとても安心できるものではない。

「そう言う貴方は、ランサーのサーヴァントか。一つ聞きたい、先程学び舎で戦闘を行っていたのは貴方か。」

「そうだ、だがさっきのは興醒めだった。あんなのは俺が求めてたものじゃねえ。しかしアンタは違うだろ？セイバー!!」

ランサーのタガは既に外れていた。質問に答えるや否や懐へと潜り込みその槍を突き出す。

「ツツ！問答無用か!!」

打ち合いが始まる。槍と不可視の剣。見世物というには余りに激し過ぎるそれは、甲高い金属音を打ち鳴らし、辺りに共鳴音を響かせる。

「……あれが英雄同士の闘い。とても俺じゃ太刀打ちできない……！」

突き、振り払い、振り下ろし、そしてまた突く。ランサーの繰り出す槍撃の数々は、セイバーを縫い付ける様に防御に徹しさせていた。その光景に驚き隠せない士郎。

そう、これが英霊。歴史に名を刻む者たちの闘争なのである。

「ツ、セイバー!!」

槍と剣がお互いを弾き、二人の間に距離が生まれる。それはランサーの槍は届いてもセイバーの剣は届かぬ距離。ランサーはこのタイミングを逃さなかった。

「へっ！これだけ打ち合えばその得物の長さ程度、測ること造作もなし！」

渾身の突きが、セイバーに向けて放たれる。日常では決して目にする事のない、正に異次元の速さを伴って、その切っ尖は寸分の狂いもなく体の中心に向かっていった。

「……はあああ!!」

風、はたまた台風か。轟音を引き連れてセイバーの剣が、槍の芯を捉える。半端な威力では防げなかっただろう突きを、その風は見事に弾き飛ばした。

「……不可視の剣の正体は風か。空気の膜で光を屈折させてるわけか。面白い、一体お前は何処の英霊なのか余計に気になってきやがった。」

「……………」

確かに、セイバーは己の剣の正体を露見させる行動を取った。しかし、その一瞬で不可視のタネをランサーは見抜いたのだ。セイバーは警戒のランクをまた一つ上げる。

距離を置き、再び視線が交差する。弾き飛ばされた筈の朱槍はいつの間にかその手に戻っており、矛先はセイバーへと向いている。

「相手……次、仕掛けてくる。」

さやが何かを察した。それは、セイバーも承知のようで剣を構え直す。

「……チツ、都合のいいことばかり言うマスターだぜ。」

ランサーが何かを呟いた。

そして、魔力が爆発的に高まる。槍はより真紅に染まり、凶々しい雰囲気纏う。死を纏う茨の棘が、その本領を發揮する。意味を違うことなき必殺の槍術が放たれようとしていた。

「あれは……」

思わず、士郎の口から声が漏れる。

「マスター!! 宝具が来ます、離れてください!!」

その魔力の高まりに、セイバーは臆することなく構えを取る。しかし、かの槍に対し正面に立つのは悪手だ。間合いに入ってしまったえば最期、間違いなく心臓を貫かれることであろう。

それを知る由もないセイバーの行動に、ランサーは笑みを浮かべた。

「……土郎、あれ、多分いける。」

「……………わかった、行こう。」

交わされるは、確認のための短い会話。二人の意思はもう固まっていた。

一度放たれれば避けることなど不可能な槍。ランサーは自らの実力に絶対的な自信を持っていた。事実、それは過信でも慢心でもない。

……だが、今日の彼は圧倒的にあるものがある欠けていた。

『刺し穿つ死棘の槍ツツ!!』

瞬間、因果の法則が逆転する。既にセイバーの心臓へ既に当たっている槍は、当たっているのだから心臓へ向かう。それに加え彼は最速のサーヴァントであるランサーだ。その動きの速さにセイバーの反応がコンマ数秒遅れる。

まずい、やられる。セイバーは向かってくる槍を前に死を感じた。直感が言っている、これを逸らさねば死ぬと。

「……無駄だ、コイツからは逃げられねえよ。」

まるで、心臓へ向かうのが自然であるかの様に、槍の切っ先はセイバーに向かう。そう、ランサーが言うようにどうあがいてもコレは胸に突き刺さるのだ。

……この身は鞘でできている

声が響いた。

「セイバー!!今だ!!」

「ツ!?っはい、恩に着ます!」

セイバーがランサーの身体を吹き飛ばす。セイバーの身体は無傷であった。

「づああ!!?」

咄嗟に受け身を取ったものの、ランサーは地面に叩きつけられコンクリートを削りながら轟音を立てる。

崩れた体勢、理解できぬ状況。これほどの隙は戦いにおいて他にありません。勿論それを逃す者が英霊になれる筈もなく、セイバーは追撃の一步を既に踏み出していた。

「はあああ!!」

不可視の剣が真っ直ぐにランサーへ向かう。剣が描くは最短の軌道。そう、突きである。

「つたく、ランサーにも関わらずツキ突きがないとは我ながら嫌なもんだぜ。」

面白くも無い洒落を言いながら悪態を吐く。

「……」剣がなにかにぶつかつた。しかしセイバーの洗練された突きの前に、多少の障壁は意味を成さない。故に、それは瞬時に破壊される……が、ランサーが体勢を立て直すには十分な時間を稼いだ。

セイバーの渾身の突きはランサーの顔を掠めたものの、傷を負わせるまでには至らなかった。

「……今のはルーンの魔術。ランサー、貴方は魔術師でもあつたのですか。」

そう、あの瞬間にランサーが貼った結界は魔術によるものだ。彼は、懐より取り出したルーンを刻んだ石を使って障壁を張ったのである。

「もう、真名は割れてるだろうから言うが、ケルトの戦士は一芸じゃ成り立たねえんだよ。槍に剣に弓に魔術に素手。ひと通り使えずに戦場で生きのころうなんざ、到底無理な話だ。」

己が肉体一つで戦場を駆けた彼は、例え槍が無くとも英雄なのかもしれない。……いや、この場を見るに例えという表現は正しくない。

「まあ、だが今は俺の話は正直どうでも良い。なあ、その嬢ちゃん。俺の槍を何処へやった?」

ランサーの手には己が半身とも言うべき槍が存在していなかった。あの一瞬、確かに真名を解放された朱槍はセイバーの心の臓に向かっていた。しかし、そこに飛び込んでくる影が一つ。その正体は、生身の人間であるさやだった。

本来なら槍はさやの身体を貫き、なおもセイバーへと向かう筈だった。だが、驚くことに槍はさやの体に触れるとたちまち消えていった。そう、槍は本当に無くなったのだ。

「此処」

宣言するさやが指すのは胸。

「私は、鞆。この身は鞆できている。」

ランサーはいよいよ、絶句した。そして、その事実と今宵の自らの運の無さに、段々と笑いまで込み上げてくる。

槍は、鞆に収められたのだ。それが正しい事実だった。